

# 科学技術 社会と関わってこそ

私たちは科学や技術にどう向き合っていけばいいのか。「問われる科学」最終回では、東日本大震災が突きつけた課題、生かすべき教訓について3人に聞いた。



問われる科学  
7 教訓を生かす

## 分野の縦割りを超えて

防災学術連携体事務局長 米田雅子氏



よねだ・まさこ 1956年  
生まれ。新日本製鉄などを  
経て慶大特任教授、防災学  
術連携体事務局長。専門は  
地域公共政策。岩手県金石  
市などの復興にかかわる。

けではなく、噴火や台風、  
竜巻、ゲリラ豪雨などもあ  
る。これまで起きなかった  
場所でも起きることも考えら  
れる。一つの災害を乗り越え  
た後にも新たなリスクは  
生じる。

にも、分野を超えて研究し  
ていかなければならない。  
震災後、被災自治体には  
いろいろな学会から復興の  
提案がいくつも寄せられ  
た。だが、自治体に読み込  
んで考える余裕はない。多  
くの分野の知恵がまとまっ  
た形で提案できるようにな  
ればいい。

今年1月、地震や気象、  
土木、救急医学など47学会  
が集まり「防災学術連携  
体」が発足した。震災で、  
研究者が自分の専門で成果  
を積み上げていくだけでは  
様々な自然災害に対応でき  
ないことが明らかになっ  
た。その反省から、日本学  
術会議とともに、分野を超  
えた防災研究を進めて被災  
地の復興を目指す試みた。

震災前は、それぞれの研  
究分野の間に意識のギャッ  
プがあった。例えば建築や  
土木では大地震に備える意  
識は高かったが、大津波は

それほどでもなかった。発  
生の仕組みなどを研究する  
理学系と、その仕組みにと  
う対応するかを考える工学  
系との違いもある。そこ  
へ、個々の研究者の認識を  
上回る自然災害が来た。

連携体では、研究分野ご  
と、それも違う。

「津波が来た」「地震が起  
きた」という情報だけ社会  
に発信すればいいわけでは  
ない。防潮堤のようなモノ  
だけつくればいいのかとい  
うと、それは違う。

「想定外」と言わないため  
に、日本は災害列島。地震だ

連携体には、都市計画や  
機械、宇宙、海洋、農業、  
エネルギー、歴史など様々  
な分野の学会が加わった。  
今後、災害が起きた時に  
を期待してのことだ。たこ  
つばのタコにならず、幅広  
く問題の解決に挑んでもら  
いたい。連携体は、そのチ  
ャレンジの土台になること  
を目指している。

(聞き手・木村俊介)